

# 東京大学 理学部弘報

第1巻 第5号 昭和44年3月15日

---

## 内 容

久保理學部長に昭和44年度日本学士院恩賜賞	2
昭和43年3月末にご退官される先生方	
吉田耕作教授(数学教室)	3
藤田良雄教授(天文学教室)	4
森野米三教授(化学教室)	4
前川文夫教授(植物学教室)	5
理学部の制度改革についてのアンケート	6
お知らせ(東京大学再建基金, 地球物理学教室藤代技官退職)	6
理学部全員交渉第2回会合流会	7
編集後記	8

東京大学全体としてはまだまだ事態が落ち着いたとはいえない現在である。3月に入っても、本郷構内では3月3日に法学部研究室の再破壊が行なわれて警察隊の出動を要請せざるを得ない事態がおこり、また駒場では事態解決がまだまだ先にならざるを得ない。私達の理学部では、学部4年生は4月20日を目標にストライキで遅れた授業・実習を取り戻すよう努力をしており、学部3年生もなるべく早く遅れを取り戻すようつとめている。一方理学系大学院では予定通り年度末には博士課程・修士課程ともに修了できるようになっており、4月から博士課程に進学する人達も内定にいたっている。本号では第2回理学部全員交渉の結果を一つの重要な報告事項と予定していたが都合により流会となったので予定記事が掲載できず残念です。一方、3月12日には久保理化学部長に学士院恩賜賞授賞決定という朗報が入り、既に新聞で知られたことではありますが、理学部としてもおめでたいことですから本号に掲載します。また多年本学理学部につくされて本年度末をもって退官される方々にうかがったお話をも本号の主要記事とさせていただきます。

## 久保理化学部長に昭和44年度 日本学士院恩賜賞

3月12日に開かれた日本学士院定例総会において、昭和44年度日本学士院賞受賞者が決定された。日本の学界最高の栄誉とされる学士院賞のしかもそのうちの一つを選んで与えられる恩賜賞が久保理化学部長に授与されることになったことは、まことに慶賀の至りです。

正式の授賞式は本年6月下旬に天皇御臨席の下に日本学士院講堂で行なわれます。

久保理化学部長授賞の対象となりました研究は  
非可逆過程の統計力学における線型応答理論

であります。久保教授の初期の業績は「ゴム弾性の統計力学」であり、日本の物性論研究の黎明期における注目すべき業績として高く評価されています。これを出発点として、固体物理学の種々の分野で多くの論文を発表され、わけても磁性理論、とくに磁気共鳴吸収のスペクトルの形態に関する論文は高い評価を受けています。そしてこれが「非可逆過程の線型応答理論」へと一般化されるに至りました。

粒子集団が熱平衡にある場合については、集団の性質を理論的に理解する一般的方法はおおむね確立されている。しかし集団に外力が加わって熱平衡からずれた場合の性質を取り扱う方法は現象が多様であるために一般的な理論が形成されていなかった。外力が小さい場合には、それに対する集団の応答は外力に比例する。外力が時間とともに変化する場合の応答は、変化の速さ如何によって応答のおくれなど興味深い現象が種々あらわれる。集団の力学的性質と外力の種類を与えてその応答を極めて一般的に確実な理論的基礎をもって導く方法を与えたのが久保理論とよばれる「非可逆過程の統計力学における線型応答理論」である。

久保理論がどのような現象の解明に理論的基礎を与え

るかの例をあげる。電気伝導率について、強磁場の下または極低温下の場合には、金属半導体などでいままでの理論では説明できない現象や、理論の適用限界をこえた現象が見出されており、その説明には久保理論が一般的効用を示すことが実証されている。久保理論にもとづいて磁場下の電気伝導とくにその量子効果に関する理論が現在では協同研究者の協力を得て発展している。またスペクトル線の形状に関する応用も広い。光の吸収とか磁気共鳴スペクトルとかは外力がその振動数で変化する場合の応答であり、久保理論の活用舞台である。とくにスペクトル線の形状が温度や振動数によってどのように変化するかは、その物質が内に持っているいろいろな緩和過程によって複雑に変化する。これらの実験を解析して逆に物質内で何が起きているかを解きほぐす理論的な武器を久保理論は提供している。たとえば戦後急速に発展した磁気共鳴現象の研究とくにそのスペクトル線の形状について久保教授とその協力者によって発表された理論の論文が、その解析基礎として広く引用され、国際的にも定説となっている。また超伝導体の研究、中性子線による磁性体の散乱現象の研究などにも久保理論が広く応用される。

このように久保教授は近年における日本の統計力学の水準を高めた業績が特に高く、先年統計力学国際会議が日本で開催されたのも日本における統計力学の発展を背景にしている。

このたびの久保理化学部長の日本学士院恩賜賞受賞を喜び、今後ますます御研究が進展されることを願っております。

久保理化学部長は、このたびの受賞の栄誉は自分一人に与えられたものではなく、多くの方々の御協力と御援助のおかげと言っておられますが、それにしても久保教授御自身の御努力の賜でありますことは何人も疑わぬところであります。

## 昭和44年3月末に ご退官される先生方

理学部では昭和44年3月末に、東京大学での慣例により、還暦を迎えられたので後進に道を譲られるためにご退官される先生方は

数学教室	吉田耕作教授
天文学教室	藤田良雄教授
化学教室	森野米三教授
植物学教室	前川文夫教授

であります。上記四先生とも東京大学理学部の発展のためにいろいろと御尽力下さいましたこと、またそれぞれの専門分野におかれまして国内で学会や各委員会では指導的役割を果され、また国際学界におきましても広く御活躍されましたことは申すまでもないことであり、詳しく記せば多大の紙面を要することと思しますので省略させていただきます。各先生とも目下特に御多忙な日々を送っていらっしゃると思いますが、時間をさいていただいておりますので、その時に聞かせていただきましたことの一部を収録いたします。みなさんが御関心をお持ちのことをすべて詳しく聞かせていただいたわけではありませんので、その点御諒承下さい。特にお聞きになりたいことについてはみなさんが折にふれておたずねになれば各先生方は御都合が許す限り喜んでお話し下さると思います。

### 吉田耕作教授



明治42年2月7日広島市生れ

現住所：神奈川県中郡大磯町東小磯宮ノ上 1007-6  
略歴：昭和6年10月 東京帝国大学理学部数学科卒業後、約1年半大学院学生  
昭和8~17年 大阪大学数学教室助手、助教授  
昭和17~28年 名古屋大学教授  
昭和28~30年 大阪大学教授  
昭和30年より 東京大学教授

専攻：函数解析および確率論

戦争中名古屋大学に奉職されておられた先生は、教室が松本へ疎開し、御家族は関ヶ原に疎開されて御不自由な生活ではありましたが夢中で過された由です。そして戦後の住宅難・食料難の時代での苦しさはやはり最も辛かった思い出とのことです。

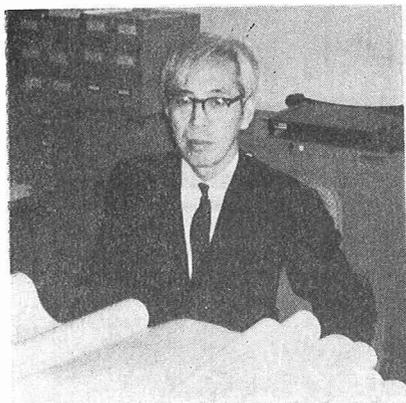
数学界では角谷静夫氏（現エール大学教授）の尽力などで戦後早く諸外国の文献が入るようになってありがたかった。日本数学会の立直りに弥永元理学部長らの御尽力に多くの方々とお手伝いできた。なおまた1955年に東京で開催された代数整数論国際会議は諸外国との関係を密接にするのに与って力があつたものであり、この会議開催運営に際しては末綱、正田（建次郎）、弥永三先生のお手伝いを多くの方々とともにできたのは幸いであつた。本年4月1日~8日には御専門分野の函数解析国際会議が東京で開かれることになっており、この会議の組織委員会委員長であられるので、この国際会議を間近に控えて準備に御多忙であります。国際会議会場としては当初は東京大学を予定していましたが、昨今の事情により大手町の経団連会館に会場を移した由です。

数学の分野でも最近では研究方法が発展し、文献が多くなり、専門誌・専門図書が多く出版されるようになり、数学人口も多くなってきたので、今後研究者の協力を一層密にして数学発展につくしていただきたいと望んでおられます。

吉田教授は昨年10月に数学教室大談話会で「私の遍歴」と題して御自身の研究歴をもあわせてお話しされた由です。先生と伊藤・藤田・田辺（阪大）三教授共同の御仕事でありました「解析的半群の理論及び応用」に対して昭和39年には藤原賞が授賞されております。また昭和42年には「近代解析の研究」で日本学士院恩賜賞を受けておられます。海外御出張は10回近くされましたが、いずれも3カ月以内の短期間出張でありました由です。

ご趣味はテニス、読書、写真など。

## 藤田 良 雄 教授



明治 41 年 9 月 28 日 福井県三国市生れ

現住所：港区赤坂 5 丁目 3-28-306

略 歴：昭和 6 年 3 月 東京帝国大学理学部天文学科卒業後、東京天文台助手兼理学部助手をふり出しに理学部講師、助教授、教授と昇進された。東京天文台にも兼務された。

専 攻：天体分光學、特に低温度星のスペクトル研究

藤田教授は東京大学ご卒業後、38年の長きにわたって東京大学に奉職された。この間理学部でもいろいろな役職をつとめられ、昭和42年4月—43年10月の間は評議員をつとめられた。

昭和30年5月には「低温度星の分光学的研究」で日本学士院恩賜賞を受けられ、40年11月には日本学士院会員に選出された。

先生が一番苦しかった思い出として語られたことは、終戦直前天文学教室が疎訪に疎開し、学生と寝食を共にされた頃のことであり、食料難の折から野草を入れて炊事をされた由である。東京のお宅も、御家族の疎開先の福井の方でも、また当時麻布狸穴にあった天文学教室も戦火で焼失の不運にあわれた。理学部三号館が建築されて天文学教室が狸穴から移ってきたのは昭和35年のことであり、終戦後それまでの間は天文学教室は木造のバラックであった。そこには今は農林省の高層ビルが建っているが、昔観象台や天文台があった頃から使われていた一等三角測量原点だけはそのまま残されている。

ご研究面で楽しかった思い出としては、岡山に74吋望遠鏡が完成した時のことを最先にあげられた。大望遠鏡がつくられることがきまったときには建設委員会をつくり、設置場所選定のために長野・静岡・岡山の三候補地で各1年間観測を実施してみた結果、岡山にきまった由である。そして大望遠鏡を使って観測を始められたと

き、目的の赤い星のスペクトルを撮影できた時は喜びをかくせなかったと話された。近年はこの新観測所にも光害（公害？）がおよびつつあり、つい最近も日本学術会議天文学研究連絡委員会委員長として岡山天体物理観測所の近くの町村の代表者の人達に光害対策協力をお願いしてこられた由。この光害は照明灯からの光が直接上方に向けて出ないようにしてもらえれば防げるとのことである。

藤田教授は長期海外出張としては昭和25年8月から26年9月にかけて米国の著名な天文台や研究所を数ヶ所めぐられ、また昭和35年5~12月カナダのヴィクトリアにある Dominion Astrophysical Observatory の客員教授として滞在され、この間大口径望遠鏡でお望みの星を観測された時のことは嬉しい思い出となっている。

また皆既日食観測には四度出かけられ、コロナと彩層の分光観測をされた。出かけられた先は、南洋のロソップ島（東カロリン群島）、北海道女満別、石垣島（沖縄）、北海道厚岸とである。

来る3月28日には天文学教室談話会で藤田教授のお話が予定されている。なおここ10年ぐらいの間の低温度星研究グループがあげた成果をまとめて出版されるご計画があり、その原稿が3月末には印刷にまわせる運びになる予定である。藤田教授は今後も研究を継続されたいご希望で、後進の人達にも落着いた雰囲気でご勉強にいらして欲しいと希望しておられます。

ご趣味はあまりないと言われますが、昔の映画のことに大変お詳しく、またご家族には野球に興味を持たれる方がおられない中であって、先生お一人は毎年春から秋にかけて巨人軍の戦績に一喜一憂しておられたようです。

## 森 野 米 三 教授



明治 41 年 8 月 31 日 大阪市西区に生まる。

現住所：文京区本郷 5 丁目 29-13 赤門アビタシオン  
807

略 歴：昭和 6 年 3 月 東京帝国大学理学部化学科卒業，理化学研究所片山研究室研究生，東京大学理学部助手，助教授をへて昭和 17 年 12 月名古屋大学教授。昭和 20 年 3 月東京大学兼任となり，昭和 23 年以降東京大学専任。

専 攻：分子構造論

森野教授は，有機液体および混合物の界面張力の研究で学位を取られてから，ラマン効果，電子線回折，双極子モーメント，核四極子共鳴，マイクロ波分光などの諸手段を駆使されて分子構造の研究を一貫して遂行され，平衡構造と非調和ポテンシャル函数について明らかにされてこられた。昭和 39 年には「気体電子線回折およびマイクロ波分光による分子構造の研究」と題する一連のご研究成果に対して，日本学士院賞が授与された。

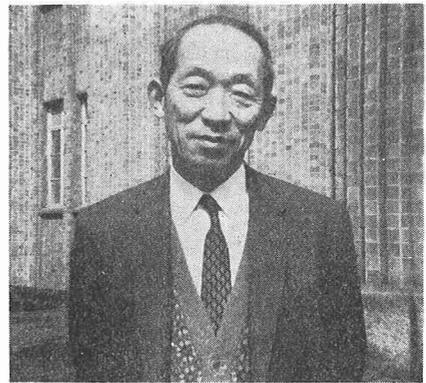
ご研究生生活途上でのいろいろ苦しかったことは，お忘れになられたとのことで，便利な測定装置がたくさん市販されている現在とはちがひ，苦心を重ねて実験装置を自ら組立てられ，その装置を用いて世界にさきがけて誇るべき結果を出された嬉しさの前には辛かったことなど吹きとんでしまったことと思われまふ。昭和 17 年の頃， $C_2H_4Cl_2$  が trans 形と gauche 形の回転異性体の混合であるとの証明ができた時には，ラマン写真のフィルム水洗が待ち切れなくて濡れたままのフィルムを持ち帰られたとのことです。

東京大学では理学部が中心となって計算機が早くから使えるようになり（物理学教室高橋教授・後藤助教授が開発されたパラメトロン計算機），物理化学関係の仕事が大変進歩したことを喜んでおられます。分子科学研究発展のために分子科学研究所を設立する案ができ，昭和 40 年には日本学術会議の勧告が出されているが，まだ実現に至っていない。森野教授は分子科学研究所設立運動推進に尽力しておられ，同研究所設立の実現により，分子科学がさらに大きく発展することを期待しておられます。一時代前の諸先輩の頃は，わが国の立地条件も悪かった故もあって，諸外国での研究水準に追いつくことを急務としていたが，現在ではわが国の研究者の努力により対等となり，これから先は全国の大学の研究者がよい交流を保って協力し，衆知をあつめて日本独自の研究を育ててゆかねばならず，そのためには深く思索することができる静かな環境が必要であることを強調された。学問に対する注意として，また一人間としての態度として，正法眼蔵随聞記に書かれているいろいろなことが参

考になりますと話され，ご自分のお好きな言葉として「華は愛惜にちり，草は棄嫌におふるのみ」の句を示されました。

森野教授は昭和 29~30 年にかけて米国インディアナ州の Purdue 大学に赴かれたほか，短期海外出張を数回されました。ご趣味は登山で，理学部山の会会長をつとめられたこともあります。

## 前 川 文 夫 教 授



明治 41 年 10 月 24 日 三重県松阪市生れ

現住所：杉並区清水 1 丁目 13-12

略 歴：昭和 7 年 3 月 東京帝国大学理学部植物学科卒業，その後大学院学生，副手，助手，講師，助教授をへて教授になられた。

専 攻：植物形態学，植物分類学

前川教授が学生であられた頃は植物学教室はまだ小石川植物園の中にあつた。中井猛之進教授の下で植物分類学を学ばれ，カンアオイとの永いつきあひが始まり，今でも親しくしてもらっているとのことである。

昭和 14 年から 18 年にかけて一兵士として召集され，揚子江中流の安慶に駐留されたとき，大陸での植物に接する機会に恵まれ，植物の進化・形態を系統と分類の目からみるようになられたとのことである。中国大陸滞在中に得られた貴重な植物学の発想とともに持ちかえつたマラリアには半年間苦しめられた由。昭和 31~32 年には一時御健康を害して入院されたこともあり，この御病氣中あるいはまた応召中に研究が中断されて後れをとつた気持に苦しめられたと言われる。

理学部二号館内の教室では海外調査にでかける機会が少くない。前川教授は三回にわたつて南米大陸に調査に行かれていた。第 1 回目は 1960 年にアンデス地帯学術調査（第二次）に副団長として参加された。この調査隊

の主目的は文化人類学的調査であり、ペルーのコトン遺跡発掘のかたわら付近で植物調査をされた。第2回目としては、1965年10月から翌年2月にかけて、第一次東亜関連植物調査隊の隊長として、ペルーを主とし、ボリビア、エクアドル、チリにも行かれた。次いで第二次東亜関連植物調査隊6名が1968年10月に出かけた時も隊長として赴かれ、隊員は本年3月末に帰国する予定ですが、隊長のみ一足先に帰国された。その時の採取資料の一部は現在輸送中であり、到着を待ってられる。東亜関連植物とは東アジア地域で見慣れた植物で世界の他地域でも見られる植物のことで、これを研究して植物の進化や地球の変遷を知ることができます。ドクウツギ(日本では一種類ある)の世界分布を見ると昔の赤道(古赤道)は現在の赤道と大分ちがっていたと結論されます。前川教授はこのようなことを発刊されたばかりの岩波新書「植物の進化を探る」を嬉しそうに聞きながらお話し下さいました。この結論が日頃私の身近の仲間が研究している古地磁気学からの支持もあると聞きまして、植物学が大の苦手である筆者も親近感を覚えました。

東亜関連植物調査の結果については、既に植物学会誌や東京大学理学部紀要に一部は発表しておりますが、まとまった形で分りやすい報告を出す義務があると考えられ、その責任をなるべく早く果せるよう今後ともまともに努力される生活を送られるとのこと。植物学もいろいろと分化してきましたが、植物学を専攻される人達にはどう進むにしても植物群の知識を持って欲しい、形に関心を持って欲しい。これは一見古い考え方だがもう少しつっこんで研究して欲しいと希望を述べられました。

ご趣味はとの質問には、強いてあげれば植物切手蒐集とでもいうところでしょうかとのお答えでした。

## 理学部の制度改革についてのアンケート

理学部総合計画委員会ではたび重なる会合を開いて理学部の将来像について意見をまとめつつある。理学部弘報第1巻第2号(44年1月31日)にも委員会活動方針について述べてあります。このたび同委員会は

- I. 新しい理学部の構想について
- II. 理学部の学部教育のあり方について
- III. 大学院の学生構成について
- IV. 博士課程の年限について
- V. 入試の方法について

## VI. 以上の項目以外の問題点について

アンケート方式でみなさんのご意見を集めることになりました。この調査には学生・院生諸君もできるだけ多くアンケートを寄せて欲しいと思いますので、アンケート用紙は理学部事務部または各教室事務室に用意しておきますから、ご意見を遠慮なくお寄せ下さい。

.....

## お知らせ 東京大学再建基金

このたび東京大学の再建をはかるため、東京大学再建基金を設けることになりました。再建基金は、人格のない財団として運営し、再建基金の管理運営の責任者は総長とし、事務は庶務部で取り扱い、金銭の管理は経理部で行なうものとする。再建基金の管理運営の具体的なこととしては、

- (1) 再建基金の管理運営のために、総長の指名により、若干名の委員からなる運営委員会を設ける。
- (2) 再建基金は、きょ出者および寄付者の種別ごとに分けて管理し、それぞれの意図に副う目的に使用するよう努める。
- (3) 被害の大きい部局においても、きょ出金は一応すべて再建基金に対して行なうが、そのきょ出金は、きょ出者の属する部局の再建に優先的にあてるものとする。寄付金についても、原則としてこれに準じて取り扱う。
- (4) 再建基金は、大学の施設設備等の復旧のほか、運営委員会が大学の再建のために適当と認めた目的に使用することができる。
- (5) 再建基金は大学の施設設備等の復旧・新設にあてる場合には、再建基金から大学に対する寄付の形式をとることとする。
- (6) 運営委員会は、再建基金の運営方針およびその経理について、きょ出者および寄付者に対し、適当な方法で報告するものとする。

教授会構成員は、各人の意志に基づいて再建基金に対してきょ出を行なう。再建基金は、とくに申出のあった東京大学関係者、およびその他の一般人の厚意による寄付を受けることができる。きょ出金および寄付金に対しては免税措置がとられるよう取り計らうことになっていきます。

## 藤代春松技官（地球物理）退職



明治 37 年 2 月 20 日 東京都深川生れ

現住所：目黒区祐天寺 1-30-2

昭和 6 年 3 月東京帝国大学理学部地震学教室に勤務されて以来、38 年余にわたって地震学教室、地球物理学教室の工作室を守ってこられた。

藤代技官が来られた当時の地震学教室は、現在の施設部電話局のあたりに木造建物があり、近くに地震計が置かれていたので、地震計への影響を考えると当初は足踏み旋盤を使っていたが、その後モーターが使われるようになった。昭和 16 年に木造二階建の地球物理学教室が弥生町浅野邸キャンパスに建てられた時に、工場もそちらに移った。昭和 39 年には現在の理学部 3 号館第 3 期工事でできた地下のボイラー予定室に地球物理学教室の工場が一応入ることになり、さらに本年早々理学部 3 号館第 4 期工事により増築された部分の地下室に工場が移されることになり、現在引越しは終り、最終的な地球物理学教室工場の着き先での作業場整備にお忙しい。その矢先に定年退官されることはさぞ心残りであろう。

藤代技官はこと工作に関することはなんでも幅広く手がけなければならなかった時代を過ぎ、地震計はじめ計測装置の試作・改造・修理などで地震学教室・地球物理学教室の研究者を長年に亘って助けてこられた。戦前は、当時の先生方や研究者が毎年のように夏期・冬期の休暇を利用して行なう探鉱調査に同伴し、南は九州から北は北海道まで日本国中を歩かれた。また支那事変が始まる前には、やはり地下資源調査のために夏 1 ヶ月間ほど満洲里から外蒙古までも足をのびた経験があり、満洲にはその後をもふくめて 3 度行かれた。昭和 18 年には台湾、シンガポールを経て南スマトラまで油田開発に動員されたが、この時にはとても生きて帰れまいと思わ

れたが、最後の引揚げ船で昭和 20 年 2 月無事帰国できたとのことである。昔の測量隊や観測班は重い電磁オシログラフや観測装置を手で持運び、車中であっては器械を膝の上に乗せてショックがかかることを極力避けるよう細心の注意を払いながら行動した辛さは忘れられないと語る。現代の観測の技術や手段の進歩は著しく、当時とは隔世の感がある。

藤代技官は柔道が得意で、将棋や釣りもお好きである。地球物理学教室員一同は藤代技官の長年のおつとめならびに苦勞に感謝していきと共に、地球物理学の創設以来の歴史を知っておられる残り少ない人の一人を失うことを大変残念に思っています。

## 理学部全員交渉第 2 回会合流会

理学部全員交渉は、先に 1 月 8 日（水）午後 1~7 時に七徳堂で開かれてからあと、第 2 回会合として先回討論をつくすことができなかった議題 5 および未討論議題 6~13 について全員交渉を行なうことについて予備折衝がつづけられた結果、

3 月 12 日（水）午後 1~7 時

於工学部 2 号館大講堂

と公示が出された。議題は

5. 医学部処分の不当性を認め、学部長・評議員は責任をとること。（学部・大学院）
6. 文学部処分の不当性を認め、その撤回に努力すること。（学部）
7. 6 月 17 日の機動隊導入を自己批判すること。（学部・大学院）
8. 今後学生の承認なしには、一切の捜査協力および警察力の学内出動を拒否すること。（学部・大学院）
9. 昭和 43 年 1 月 29 日以来の闘争に処分を出さないこと。（学部）
10. 学生・院生の自治活動の自由を認め、学内自治団体を公認し、交渉権を認めること。（学部・大学院）
11. 「青年医師の一大団体として青医連を公認し、交渉権を与えよ」というわれわれの要求を支持し、その実現に努力すること。（学部）
12. 総長・学部長選挙において、学生・院生の拒否権を認めること。（学部・大学院）
13. 学生・院生の意志が反映される大学の管理運営制度をもうけること。（学部・大学院）

であるが、この議題は昨年 10 月にきめられたものである。しかし本年 1 月 8 日に第 1 回の理学部全員交渉が行なわれ、1 月 10 日には秩父宮ラグビー場における七学

部集会があり、七学部代表団との確認書がとりかわされ、2月11日には15項目について確認書が発効することとなったなどの諸経過があるので、討論内容については第1回当時に予想されていたものとはかなり違ったものになる筈である。すなわち確認書の精神を学部段階で具体化してゆく方向に進められよう。

3月中旬としては珍しい大雪が降った3月12日、予定会場には、1時半頃までには百数十名の学生・院生と約三十名の教官が集まったが学生間の意見の対立のため正規の会合を開けるに至らず、予備折衝を開いているうちに、雪のために早く帰宅するよう勧める情報も入り、午後2時半頃流会となった。そして今後の開催については予備折衝に委ねられた。

---

## 編集後記

いよいよ年度末が近づいてきて、本年度はいろいろと予定に支障をきたすことが多かったので、みな年度末の片づけに追われていることと思います。巻頭にも記したように、本号は久保学部長の日本学士院恩賜賞受賞、後

進に道を譲られるためご退官される方々のお話が主要記事になりました。本年度末に理学博士の学位を得て大学院生活を修了される予定の大勢の諸君は、これまでの生活を顧みていろいろと楽しかったこと、あるいは研究が思うにまかせぬ時期での苦しかったことなど思い出が多いことでしょう。めでたく理学博士の学位を得られる諸君の氏名および論文題目を次号にまとめて掲載して記念にしたいと考えております。まためでたく修士課程をおえられて、あるいは他大学から受験されて合格し、博士課程に進学することになる諸君の氏名も次号には載せたいと思います。

理学部弘報も出版されはじめて以来3ヶ月たちました。私の準備不足のためにみなさんが御満足されるようなものにならず残念です。編集している私自身、時によっては情報過多の気味がある現在、満足がゆかない弘報を1ヶ月に2回もお手許に届けるのに気がひけています。新年度を迎えるに当りましていろいろとご意見をお寄せ下さるようお願いいたします。

地球物理研究施設 福島 直  
(内線 7511)